

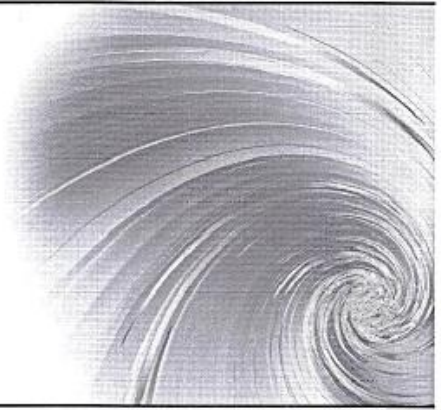


都道府県作業療法士会連絡協議会

NEWS

発行所：都道府県作業療法士会連絡協議会
四国支部事務局
〒780-0056
高知県高知市北本町一丁目2-6
医療法人松田会 近森オルソリハビリテーション病院
TEL:088(822)5231 FAX:088(820)1919

発行人 平松 真奈美
編集人 仲川 健



第30回四国作業療法学会のご案内



学会長 形山 泰次郎

昨年の10月、第29回四国作業療法学会へ次期学会の実行委員数名と参加してきました。これからの作業療法を考えるにあたり、沢山の示唆を与えていただけるとなりました。前田学会長はじめ実行委員の皆様お疲れ様でした。

さて、第30回四国作業療法学会は2019年9月28日(土)・29日(日)の両日、愛媛県伊予郡松前町の松前総合文化センターで開催いたします。学会テーマは、「活かそう作業の力！伝えよう作業療法の魅力！挑戦しよう作業療法士の可能性！」としました。

いま、わたしたちを取り巻く環境は大きく変わっております。医療技術の発展、社会保障制度の多様化、地域包括ケアシステムの深化など、挙げればきりがありません。このような変革の時代を乗り越えて行くためには、個人がしっかりとした視点をもたなければならないと考えます。そのためには、「いまずべきことは何か。」という視点を持つことが大切です。一方では、個人を支える集団も必要です。同じ方向を向き合う仲間との情報交換や研鑽の場として、四国の会員が集うこの学会を活用していただければと思います。

当日は、日本作業療法士協会第五代会長である中村春基先生をお招きして、特別講演を行っていただきます。また、6つのセミナーを企画し、各分野で活躍されている先生方に最前線での挑戦をお話していただく予定としております。その他、演題発表など2日間を有意義に過ごしていただける企画を、ご用意しております。初日には、懇親会も予定しております。また、学会2日目には愛媛県作業療法士会主催の公開講座(災害リハビリテーション関係)が、同時開催されます。

現在、松本実行委員長のもと、実行委員が一丸となって準備を進めております。託児所など参加しやすい環境を整えていく予定です。会場は、松山インターチェンジ・伊予インターチェンジからそれぞれ車で7km前後というアクセスの良いところにあり、ショッピングモールに隣接しています。

四国作業療法士会連絡協議会の会員は、3,062名(2018年11月1日時点)となりました。今回の学会は、30回という節目の年にあたります。この秋、「愛のくに、愛顔(えがお)あふれる愛媛県」で、皆様のお越しをお待ちいたしております。

第 29 回四国作業療法学会をおえて

第 29 回四国作業療法学会
学会長 前田悠志

平成 30 年 10 月 27 日(土)、28 日(日)に高松市のレクザムホールにて、第 29 回四国作業療法学会を開催しました。学会テーマは「作業療法の未来～+ α の可能性～」で、講演が 4 題、セミナー 6 題、一般演題 35 演題を行いました。今回の試みとして、まず 1.5 日学会で 3 か所同時進行の形を取りました。遠方の参加者への考慮と同時刻に、複数あることで参加者に興味を持ったものを選んで聴講いただきたかったからです。小林毅先生の「地域包括ケア」、小林幸治先生の「CCS」、牛田享宏先生の「痛みに対するリハ」、中村光夫先生の「認知症」、セミナーも含めどれも「今」聞いていただきたい内容で、これからの+ α になり得るものだったと確信しております。また、一般演題セッションに「初発表枠」を作り、エントリーのすそ野を広げる工夫をしました。査読は通常通り行い、14 演題が発表となりました。

これらは学会の存在意義がどこにあるかを、考えさせられるものでした。近年、作業療法士が活躍する分野は多岐に渡り、一方で脈々と続く専門性を持って深く探究することが求められ、「広く深く」という相反的な課題を、解決することが求められていました。多くの学術学会が存在する中、29 回続いた四国作業療法学会を、どう方向づけるかは実行委員だけでなく、四国の作業療法士各々の課題として、これからも続くことと思います。また、ご意見をいただければ幸いです。一方、今回は学会誌の誤植や公文書誤送付など関係者の皆様には、多大なご迷惑をお掛けしました。当日も対応の不備等があったかと思えます。この場を借りてお詫び申し上げます。

1 日目終了後の交流会や、学会終了後の番外企画のフットサル交流会も含め、よく学び、よく語りあいました。他人の意見を聞き、己の作業療法を磨いていく、そのヒントをくれるのが「四国作業療法学会」だと思います。9 月には、節目となる第 30 回四国作業療法学会が開催予定です。第 30 回の実行委員の皆様、盛会になりますことをお祈りしております。

最後になりましたが、学会開催にあたり、関係団体の皆様には多大なご支援を賜りましたことに深く御礼申し上げます。また、遠方からもお越しいただいた講師の先生方、査読や座長を快く引き受けていただいた皆様、当日委員としてお手伝いいただいた県士会会員や学生の皆様、本当にありがとうございました。



受賞報告

優秀賞受賞者

松山リハビリテーション病院

菅 隆一

この度、第29回四国作業療法学会において、優秀賞という過大な評価を頂き、大変光栄に思っております。「いつかは、優秀賞を取れるような作業療法士になりたい。」と思っておりましたので、嬉しいと同時に大変驚いております。この場をお借りしまして、学会長の前田悠志先生、ならびに学会運営にご尽力頂きました運営委員の皆様、心より御礼を申し上げます。

今回、「くも膜下出血を発症後、重度の記憶障害を呈した40歳代女性—回復期リハビリテーション病棟での関わり—」と題し発表させて頂きましたが、自分の作業療法を見つめ直す良い機会となりました。試行錯誤を続けながら作業療法をしている日々ですが、自分の仕事を学会発表という視点に立って、客観的にまとめていくことで、自分なりに感じるものがたくさんありました。

今回の優秀賞を頂いたことを励みにし、これからも作業療法士としてリハビリテーションを軸とした社会貢献ができるよう、一層精進していきたいと思っております。皆様本当にありがとうございました。

総合病院回生病院

藤本 弾

この度、第29回四国作業療法学会において、学会優秀賞という過大な評価をいただきありがとうございます。この場をお借りしまして、学会長の前田悠志先生をはじめ、学会実行委員の皆様、また、日頃から活動を支えてくださっている当院リハビリテーション部のスタッフの皆様方へ、厚く御礼申し上げます。

今回の発表では、急性期脳幹梗塞者に対する姿勢制御系に着目したシングルケーススタディでした。今回は姿勢制御系について、また寝返りについて、そして患者様の困難性についても考えを深めていくきっかけになりました。臨床から学ぶことは多く、シングルケーススタディではより深く掘り下げて考えることができます。そして、それは他の患者様の治療場面にも応用していけます。今学会のテーマでもある $+\alpha$ の可能性を見つけるためにも、臨床現場で日々前を向き精進していければと考えております。今後も、ご指導ご鞭撻の程よろしく願いいたします。

高知大学医学部附属病院

大石 大

この度は、優秀賞に選出して頂きありがとうございました。ここ数年は基礎研究に取り組んでいたこともあり、四国学会での発表は4年振りと怠けていた感もありましたが、過大な評価をして頂き感謝しております。近年の術後後療法や痛みに対する治療のトレンドは『いかに活動するか』であり、その過程で目標決定(Decision making)とペーシング(活動の調節・段階付け)が、重要であることは周知であります。このような背景から、近年トピックスになりつつあるclient-centered multimodal treatmentを取り上げ、小生が有用であろうと考えるリバース型人工肩関節の実例を報告致しました。当日は、座長の石井先生や実行委員の廣瀬先生とも内容の濃いディスカッションをさせて頂き、改めて運動器疾患に対する本法の可能性を実感致しました。今後も研鑽を重ね、高知大学から新たな知見を発信していきたいと思っておりますので、ご指導の程よろしく願いいたします。



県士会トピックス

徳島県作業療法士会 細川友和



徳島県



徳島県作業療法士会 事務局

徳島県作業療法士会では、平成 27 年度より地域医療介護総合確保基金事業費補助金（介護分）の助成を受け、介護予防推進リーダー研修を開催しています。

この研修は、地域包括ケアシステムに対する理解を深めることはもちろん、地域に資する人材を育成することが目的で、介護予防・日常生活支援総合事業を中心に、社会保障制度や地域ケア会議など 4 日間 16 テーマという、濃厚な研修内容になっています。さらに選択研修として認知症サポーター研修、自殺予防サポーター養成講座等も開催しています。今年度中に修了者は 220 名を超える見込みです。

また今年度は、より実践的なリーダーを育成するためにアップデート研修を 2 日間 8 テーマで開催し、地域ケア会議、訪問型・通所型サービス C 等を講義や模擬体験、グループワークを通して学び、33 名が修了しました。

今後も地域包括ケアシステムの基礎知識を学ぶ場として、多くの作業療法士や関係職種の方に参加いただきたいと思います。



香川県作業療法士会 前田悠志



香川県



香川県作業療法士会 事務局

平成 30 年 9 月 2 日（日）、県からの補助を受け今年度も認知症初期集中支援員養成研修会を実施しました。午前の基礎研修は、47 名の参加がありました。昨年度も含め、基礎研修受講者を対象とした実践研修も午後で開催し、54 名の参加があり修了証を発行しました。県健康福祉部長寿社会対策課井下課長様の挨拶をいただき、講師は佛教大学の荏山和生先生に加え、尚寿会あさひ病院認知症疾患医療センターの倉元貴志先生もお招きしました。また、京都府作業療法士会の認知症支援委員会から、森志勇士先生、森奈奈先生の視察・助言があり、講演・グループワークとも充実した研修会となりました。

平成 30 年 12 月 2 日（日）、認知症初期集中支援修了者研修会を実施しました。これは、継続して知識と技術を保ち、高めるための研修会で今年度から行いました。研修は、修了証を有した作業療法士で 30 名の参加がありました。講師は、佛教大学の荏山和生先生をお招きしました。坂出市地域包括支援センターの石橋常子 OT に、初期集中支援の現状と事例を紹介いただき、午後から参加者でグループワークを行いました。初期集中支援での考え方を学び、対象者の生活支援は初期集中支援にとどまらず、支援やサービス利用などを各グループで提

創っていくことは簡単ではありませんが、その可能性が見え研修会参加者が参画できるよう考えていきたいと思っています。





愛媛県



愛媛県作業療法士会 事務局

愛媛県作業療法士会 愛媛県作業療法士学会実行委員 玉井美緒

平成 31 年 2 月 17 日(日)に第 19 回愛媛県作業療法学会を開催しました。今回のテーマは「作業療法のミッション」～これでいいのか？作業療法士～ということで、日本作業療法士協会副会長でもある山梨リハビリテーション病院の山本伸一先生をお招きし、ご講演頂きました。講演では、作業療法士を取り巻く環境や役割を学び、実践動画を交えたお話では胸が熱くなりました。また、指定演題ではそれぞれの分野から 3 人の先生方に発表頂き、一般演題では若手を中心に 10 演題の発表がありました。発表を聞かせていただき、OT になりたての頃を思い出しました。患者様に「こうなりたい」「これがしたい」と言われ、必死で教科書や参考書を開き治療法を模索していたこと、仲間と一緒に「あーでもない」「こーでもない」と、とことん悩んでいたことを。まさに、今の自分は「これでいいのか？」と自問自答しました。今回の学会を通して、現状に満足せず困難に向き合うことが仕事であることを再確認し、初心に帰る良い機会となりました。



高知県作業療法士会 事業運営局特別支援教育部 篠田かおり



高知県



高知県作業療法士会 事務局

「公開講座ならびに第 2 回 特別支援教育部研修会を開催して」

平成 31 年 1 月 20 日 (日)、うめだ・あけぼの学園の酒井康年先生を講師にお招きし、公開講座ならびに第 2 回特別支援教育研修会を開催しました。

会員向けの研修会の内容は、「幼稚園・保育園・学校現場での評価と対応方法」で、発達障害分野の経験がある方に加えて、これから施設で受け入れを始める方や精神分野の方など、42 名の会員の参加がありました。

公開講座は「作業療法士から見た発達障害児の特性」と題し、高知県士会員、保育士、学校教員、教育委員会など、医療・教育・行政といった様々な分野から 150 名の参加がありました。発達障害の特性について、家庭や学校・保育園で具体的に困っている行動の原因と対応方法について学ぶことができ、「(教育とは) 違った視点で学ぶことができた」、「保育・教育の現場で実践したい」といった意見が聞かれました。

来年度も発達障害分野に関する研修会を企画・開催していきたいと思っています。



協会活動と役割

平成30年は、診療報酬・介護報酬・障害福祉サービス料のトリプル改定が、実施された年である。2025年を目途にした、地域包括ケアシステムの構築に向けた重要な改定となる。医療・介護・福祉サービスの質を高めると同時に、いかに優秀な人材を育て確保していくのが鍵となる。限られた社会保障費を日本の社会構造に照らし合わせて、いかに効率的に配分するのかがである。診療報酬は、中央社会保障保険医療審議会、介護報酬は介護給付分科会、障害福祉サービスは障害福祉サービス等報酬改定検討チームにおいて、検討を重ね提示される。当然ではあるが、改定に関する要望事項は前倒しで検討され、場合によっては数年前からの準備や渉外活動が必要である。日本作業療法士協会常務理事としての渉外活動や、制度対策部長として報酬等サービス料改定に取り組んだ年でもある。

作業療法士の活躍の場が拡大するにつれて、診療・介護報酬と障害福祉サービス料について全体を見極める必要がある。また、関係団体との渉外活動を地道に展開しながら、要望を提示していかなければいけない難しさや、作業療法士だから関われる新たな領域への提言など、次期改定に向けての準備が始まっている。いかに日々の臨床現場で、作業療法が実施されている成果・効果を示し、作業療法の特性を活かした作業療法士の専門性を提示していくかである。

厚生労働省においては、障害者の自立支援において活動と参加を、いかに地域特性に応じて実現していくかである。当然のことながら単独の職種ではなく、他職種との連携が最も効果的で効率が良いとも報告されている。今後は、多職種連携やチームとしての考えが重要で主流になるはずである。

今後の方向性と作業療法士がすべきこと

基本的な考え方は、「地域包括ケアシステム、地域移行の推進」「制度の持続可能性」「効率化・適正化」である。平成18年の診療報酬の改定時に提示された医療の「質の担保」と「効率化」は、漫然としたリハビリテーションの提供ではなく、成果・効果を求められる時代になることを示したものである。診療報酬では在宅医療へのシフト、介護報酬では利用者の活動と参加に資する取り組み評価、障害福祉サービスでは就労移行率や工賃など成果指標による報酬体系の導入や在宅医療のケア児への手厚い対応、が求められる。

作業療法士としては、職場に関わる制度や報酬等に関する内容を熟知していることは当然であり、どの領域においても、各制度間やライフステージを繋ぐ取り組みを意識して、対象者に関わる必要性がある。具体的には、医療介護間は退院時共同指導加算、生活機能向上連携加算、リハビリテーション計画提供料において、連携が強化される。医療障害福祉間では、相談支援専門員との連携が明記されたことである。介護と障害福祉では、共生型サービスが創設されたことである。

内閣府が進めている働き方改革の流れで、リハビリテーション専門職の専従要件も緩和されている。疾患別・時期別リハビリテーションが導入され、医療におけるリハビリテーション専門職の役割や機能が多機能型に変化し、それぞれが持っている専門性が見えづらくなっているのも実情である。作業療法は、作業を用いる療法であり、作業療法士は応用的動作能力の回復と社会適応能力の獲得を目指すべきである。本来ならば、活動と参加に向け作業療法士はもっと機能し保健・医療・教育・福祉・労働領域で活躍すべきである。

今後の展望

日本作業療法士協会の理事として7期14年関わり、保健・医療・教育・福祉・労働の領域において、作業療法士の活躍が徐々に見えるようになってきている。依然として医療・介護領域に約7割の会員分布ではあるが、微増ではあるが全体の会員増に加え、保健・教育・労働領域の作業療法士の存在が見えるようになったことは、非常に心強く感じている。この事は、地域で生活している人々にとって当事者・家族にとっても、領域間をつなぐ専門職の存在が明らかになっており、作業療法士の存在がより明らかになる前兆と認識している。

厚生労働省は、医療介護だけでなく障害福祉も同様に地域の実態にあった支援の一貫性と継続性の構築が急務で、安全で安心できる支援サービスの提供が保障されていることが重要である。国際生活機能分類では、活動と参加、環境因子や個人因子が関わっていることが重要であり、個々に異なる障害像に対し適切な見極めと、状態像に応じた支援の提供や状態変化に応じた支援が求められる。

障害のある子どもを育てる母親が、地域で小さい時から自分の子供のことについて、関わってもらっている、理解してもらっている作業療法士がいてくれることで、心強く感じる。まさしく、一人の対象者のライフステージによって変化する繋ぎの支援を、作業療法士間でしっかりと繋いでいくことができれば、作業療法士の存在感を示すことができるはずである。

臨床で働く一人一人の作業療法士が、今、一步とは言わないが半歩前進すれば、大きな変化に繋がると考える。作業療法士の仕事は人と関わる仕事であり、人の心に働きかける仕事なので、50年後もなくなる仕事である。平成の時代も終わり新しい年号に変わる年だからこそ、次世代を見据えた活動が重要である。

これからも作業療法士の活躍を、大いに期待したいものである。

【編集後記】

平成30年4月より、愛媛県から高知県へと事務局のバトンを受け取りました。不慣れで至らないところがあると思いますが、精一杯頑張っていきますので、よろしくお願い致します。

K.N